令和２年度　学校評価　自己評価まとめ　　更級農業高等学校

評価対象		評価項目	評価の観点	評価	成果	課題
1	学習指導	・授業改善 ・自ら学ぶ姿勢 ・本に親しむ	･それぞれの授業において「言語活動」を意識し、対話的な学習活動に取り組んでいくことで生徒が主体的に考え学ぶ姿勢を育てていく。 授業評価アンケートを実施して授業改善に活かす。	4.18	各教員が授業アンケート等を参考に授業改善に取り組んでいる。コロナのために一部学習指導計画の変更を余儀なくされたが、「基学」や各種外部模試・検定試験を実施して、生徒が社会人として求められる基礎学力を身につけられるよう努めた。また、日々課題、週末課題、外部模試や検定試験等を通して目的意識を持ち継続的計画的に学習する姿勢を育むこ	生徒の学力をより一層向上させるためには、同一授業担当者同士はもとより、職員全体の緊密な連携と指導に関する共通理解が必要であろう。自ら学ぶ意欲を持たせるために、生徒個々の変容と成長を重視する学習指導及び評価を実践し、生徒が成就感を持てる学習機会を増やしていきたい。
			「基学」、基礎力診断テスト、各種検定の受検、読書週間など多様な取り組みにより、生徒が自ら基礎学力の伸長と教養の涵養（自分をカルチベイトすること）を意識するよう図る。	4.23		
2	生徒指導	・規範意識 ・自他の尊重 ・人権教育	･ 規範意識（ルールを守ろうとする気持ち）の向上を働きかける機会を定期的に設けるとともに、お互いを尊重する人権感覚を育てる教育活動を行う。	4.45	感染症の影響もあり、少年の刑法犯が減少していることもあるが、本年度本校生徒の刑法犯発生は０。問題がある場合には、その都度学年集会の頻度を上げて実施してきた事もあり、全般的には生徒状況は良好である。生徒指導件数も激減している。	日常の小さなモラルやマナーも含め、「国家社会の形成者」となるための心遣いについて、担任をはじめ全職員で細やかな指導を実施していくことが重要。身だしなみ等の小さな指導の積み重ねが、大きな問題行動の発生を抑止するという指導方針、共通理解を職員内でさらに拡
			生徒が円滑な人間関係を築くことができる力を身につけるため、教員・生徒相互に挨拶や礼儀を重んじるとともに、連絡相談など日常的に細やかなコミュニケーションができるような雰囲気を醸成していく。	4.36		
3	キャリア教育	・進路指導 ・自己指導能力の育成	･ 就業体験や講演会、適性検査などを通してキャリア教育への取り組みを進め、生徒が自らの未来について考え、将来、社会の中で主体的に生きていくことができるよう図る。	4.05	本年度は残念ながら就業体験は実施出来なかったが、学年会や外部講師による進路ガイダンスを中心に、高校3年間と卒業後を見据えた取り組みを進めた。1年次から意識を高める取り組みを行うことで、進路選択と決定に良い影響が出ており、今後も継続して進めていきたい。	主体的に自分の人生を切り開いていけるように、自己理解、自己分析をして農業高校での体験を表現できる力が必要である。今後の社会状況の変化にも対応できるキャリア教育をさらに追及していきたい。
			卒業時の進路決定を見据えた取り組みを１年次より段階的に行い意識を高めるとともに、進学・就職に必要な学力の育成に努める。	4.15		
4	社会に開かれた教育活動	・地域連携 ・地域資源の教材化 ・自主活動（生徒会・クラブ）	･ 「信州学」など地域の資源に着目した教育活動や各種交流活動に取り組み、地域とのつながりを意識し、将来、地域のために貢献できる人材の育成に努める。	3.92	農ク:大会中止も多い中、校内では農業鑑定等の実施により生徒は、自信をつけた。生徒会:コロナ対策を講じながらの更農祭等の実施は素晴らしい成果である。コロナを理由とした誹謗中傷をしない宣言、更農シトラスリボンプロジェクトなど、主体的な活動をしている。クラブ:大会等中が止される中、力を合わせて活動を継続させることができた。	農ク:例年通りの行事が実施できるように運営方法を検討する必要がある。生徒会:引き続き自主的な活動をしていけるように導きながら活動の成果として目に見える形で評価されることを目指したい。クラブ:加入率を上げることが最大の課題。途中で退部させない。３年間継続的に活動して達成感を得られるようにする。
			生徒会・農業クラブ及び課外クラブ活動への生徒の自発的な参加と主体的な活動に取り組むように促す。	4.08		

「評価」欄は　Ａ=4（たいへんよい）　Ｂ=3（おおむねよい）　Ｃ=2（やや悪い）　Ｄ=1（たいへん悪い）で個人で評価し平均値を集計したもの。

令和２年度　学校評価　自己評価まとめ　　更級農業高等学校

評価対象		評価項目	評価の観点	成果と課題
5	農業教育	１年（基礎教育）	農業科の基礎科目の学習を通して、２年進級次のコース選択において自ら積極的な選択ができるよう指導する。	感染症による休校措置等の影響で、例年行ってきた危険物丙種の受験を中止し、大きくカリキュラムの取捨選択を行ったが。ほぼ例年通りの指導成果が達成できたと思われる。特に、農業研究レポートにおいては、各クラス代表による研究発表会を実施し、各クラスの研究・指導内容の底上げが図れたと同時に、代表クラスとなった1年4組が課題研究発表会において3年と遜色ない発表をすることができた。
		A 生産技術	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指す。	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指すことが計画通りできた。
		B 流通経済	簿記能力検定において商業科卒業生徒と同等以上の技能を習得し、事務・販売・流通系で活躍が可能であり、かつ水稲を題材とした研究を深めて4年制大学、短大、大学校への進学もできる人材の育成を目指す。	3年は全経簿記検定2級（商業）は全員取得。2年は全経簿記検定3級は全員取得済みの上、本年度2月に全経簿記検定2級（商業）を受験予定。3年については、本年度、日商簿記検定2級を受験予定であったが、感染症による休校等の措置により実施できなかった。研究においては、予定どおり実施でき、思考、判断力の向上が図れたと思われる。
		C 食品科学	食品の成分分析ならびに食品加工技術を学ぶとともに、地域の農産物を生かした加工品の開発などを目指し、食品関連産業に貢献できる人材を育成する。	２年生は食品化学、食品製造、微生物の基礎知識を習得する中でプロジェクト研究に取り組み、レポートをまとめることができた。また、３年生はこれまでの知識・技術を応用し、栄養価の高い食材を利用した新たな加工品の開発や雑草を利用して栽培した野菜の成分分析など探究的に取り組みまとめることが出来た。また、進路も食品関係の進学・就職に進む生徒も増えており、今後も授業で学んだことが生かされるよう指導したい。
		D 環境科学	身近な環境についての各種調査・研究活動を意欲的に取り組むと同時に、その成果をもとに信州の環境の実態やこれからの農業についての自分たちの考えを様々な機会に発信し、地域の環境や農業を守る人材を育成する。	２年生では食品製造や食品化学の基礎を学びながら、環境にも重点を置き、食品工場排水を資源として活用する研究を行った。また危険物乙種4類合格を目指し学習に取り組んでいる。３年生も食品残渣や排水を微生物の力で分解し、植物の生育に利用する研究を行った。新型コロナウイルスの影響で発信する機会はほとんどなかったが、グループごと協力しデータをまとめた。eco検定を受験し半数以上が合格した。
		E アグリネットワーク	栽培基礎的な学習とその利用について考え、農業の楽しさ・食の大切さなどを地域に発信するための「農業」「園芸」を活かした交流活動を考えて実践する。活動を通して地域と社会に貢献する意識と、自らのコミュニケーション能力を向上させ、卒業後も多方面において活躍できる力を養う。	２年生は栽培プロジェクト学習をとおして、他者と協力をしながら栽培学習の基礎やレポートのまとめ方を学ぶことができた。また、初の試みとして管理機の使用方法を実習をとおして学ぶこともでき、生徒の農業に対するイメージの変化があった。３年生は、ほとんどの交流学習がコロナウイルスの関係で中止となってしまったが、遊休農地の活用を目指した地域活性化プロジェクトを進めることができた。様々な学習活動を行うなかで、他者との関係の築き方を学ぶとともに、自らが責任を持って物事に取り組む大切さを学ぶことができた。
		F 園芸デザイン	草花の栽培管理の知識・技術を身につけるとともに、それを生かした交流・販売活動を実践する。地域連携を経験することでコミュニケーション能力を養成し、地域貢献できる人材を育成する。	花壇苗の栽培管理、鉢花の栽培管理を通して草花栽培の基本となる知識・技術を身に付けることができた。休校があったことで課題研究の研究テーマを検討する時間が短く、十分な研究ができなかったが、早めに準備を行い地域に目を向けた研究に取り組んでいきたい。また、販売活動をはじめとした地域交流がほとんど中止となってしまったが、今後も学習成果を地域に還元できるように取り組んでいきたい。
		G 施設野菜	施設を中心とした野菜栽培に関する知識と技術を習得し、野菜の特性や栽培に適した環境を理解する。地域農業と生産現場の担い手となるスペシャリスト養成と、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目標とする。	２年次から栽培管理を行う中で、専門的知識や技術を身に付けることができた。また、２年生では全員が農業クラブ中級検定のためのレポート作成を行い、ほとんどの生徒が上級検定を受検した。3年次では、各自が課題を見つけ研究を行った。地域に関するテーマに取り組む生徒が多く、今年度から、七二会地区と共同で土壌改良剤として竹パウダーの活用がスタートした。
		H 果樹科学	果樹の栽培管理を通じて、知識・技術ならびに態度を身につけ、地域産業の担い手を育成するとともに、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目指す。	果樹栽培の基礎的な知識・技術の習得を目標に、プロジェクト学習に取り組んだ。課題研究では地域農業への貢献を目指し、モモ・ブドウを中心に新たな省力化栽培方法ならびに高品質化栽培の調査・研究を行った。果樹の栽培・管理実習でも、協力しながら取り組むことができた。地域密着型の活動再開が急がれる。